

西伊豆健育会病院

医療連携室 相談員 神田純子・稲葉祐一

- 功 績** 病院が危機的状況に直面した際、新たな取組に率先してチャレンジし、「誰かがやる」のではなく「自分たち全員で乗り越える」という意識を他の職員に波及させ『OURTEAM』としての組織醸成に繋げた功績。
- 推 薦 者** マネージングディレクター 大友 悠平
- 推 薦 理 由** 病床稼働の減少にいち早く危機感を持ち、即効性のある対策が必要でした。今まで取り組んだことのない対策にチャレンジした事は「誰かがやる」ではなく、「私たち全員でこの困難を乗り越えていく」という、まさに「OUR TEAM」精神から生まれた対策だと思います。約600件にも及ぶポスティングを自ら率先して行い、実績に繋げ、他の職員にもOURTEAM精神を波及させた神田と稲葉を、理事長賞に推薦いたします。

内 容

今年度は4月より病床稼働が不安定な状況が続いており、特にゴールデンウィークを境に稼働率が急激に低下しました。例年5月は気候的に過ごしやすく、また地域においては田植えの時期と重なるため、一定程度の患者減は予測されておりましたが、今年度は例年を大きく上回る落ち込みとなりました。

医療連携室では、平日頃より安定した病床運用を意識し、稼働低下時には外部への働きかけ等の対策実施に取り組んでおります。今回のように予想を超える急激な稼働減を受け、緊急的に増患対策会議を開催。その際、神田職員より「地域へのポスティング活動を実施してはどうか」との具体的な提案が挙がりました。これに稲葉職員も賛同し、両名による初のポスティング巡回をする事といたしました。

神田・稲葉の両名は協力して地域を歩き、約600戸の家屋を対象にポスティング巡回を実施。実際に足を運び、地域に直接アプローチするという地道な取組によって、2名の新規レスパイト入院に繋げることができ、当院としては6月中の入院実績へ繋がりました。この取り組みは他部門にも良い刺激を与え、複数部門でそれぞれが関わる患者さんへの直接的なアプローチが開始されるなど、全職員が経営に向き合う「OUR TEAM」の姿勢を共有する流れを生む契機となりました。

また、本活動は単なる入院確保の取組にとどまらず、地域における生活環境や医療連携の課題把握という成果にも繋がりました。中心部から離れた地域では空き家の増加が目立ち、路地の多くが車椅子の通行を想定しておらず、自立歩行が困難な高齢者にとっては自宅退院が困難である住宅環境が多数確認。さらに、地域によってかかりつけ医の分布が異なり、それに伴う医療連携体制の地域差も明確になりました。一見元気に見える独居高齢者の多くが「今は大丈夫だが将来が不安」と感じている実態も判明し、地域住民が抱える見えづらい不安や課題を肌で感じる機会となりました。

今回の活動により得られた知見は、今後の当院の地域連携方針や運営戦略に活かされていくことが期待されます。地道でありながらも、地域と向き合い、新たな可能性を切り拓いた両名の姿勢は、組織全体に好影響を与えるものであります。よってここに、神田職員・稲葉職員の両名を理事長賞に推薦いたします。